



そして、お母さんに「この子犬たちたすけてあげてください」とお願いしました。でも、お母さんは、「マーシヤ、家はまずしくて、とても子イ又を育てるよゆうなんかありません」といって、その子イ又たちを町役場まで持って行ってしまいました。このままでは、子イ又たちは、殺されてしまうでしょう。それからマーシヤは、ベットの上で泣きつづけました。子イ又たちがかわいそうなのと、いつもはやさしいお母さんが、そんな冷たいことをしたことがとても悲しかったのです。夜になって、お父さんが帰ってきました。お父さんは、マーシヤの泣きはらした顔を見て、そのわけをたずねました。お父さんは、マーシヤの話を目をとじて聞き終わると静かにこう言いました。「お母さんや、たしかに私たちのくらしは

まずしいけれど、心までまずしくなってはいけません。この世のなかのすべては神さまが深い愛をそそいでつくられたものです。それを私達のせまい心でねうちを決めてしまつてよいものでしょうか？ ましてや生きているものを殺すのはもっともよくないことです。小さな命もすくえないで、どうして人をすくうことができないのでしょうか？ マーシャが、その子犬たちを教会で見つけたのも、きっと神さまのおぼしめしでしょう」

お父さんは、学校は出ていませんでしたが、教ようとしんこう心のあるりっぱな人だったのです。

お母さんは、なみだをながして、

「マーシャゆるしておくれ。お母さんがまちがってしまいました」

といいました。

よく朝、みんなで町役場まで行ってみると、幸い子イ又たちは、みな元気になっています。

お父さんとお母さんは、友だちや知り合いの人のお家をまわって、子イヌたちをひきとってもらいました。

そのなかで一番ちいさい白い子犬は、マーシャのお家で飼うことになりました。

マーシャと子犬はとてもなかのよい友だちになり、いつもいっしょにいるのでした。

ママーシャと家ぞくは、まえよりずっと心ゆたかになり、いつまでも幸せにくらしたということです。